

在中朝鮮人の植民地日本語に関する 社会言語学的考察

黄 永 熙

1. はじめに

「 」日本語というとき、「 」内には、地域や時代など多様な観点からの修飾語を入れることができる。例えば、「1940年代中国延辺地域の国民学校で教えられていた日本語」ということも考えられる。筆者はこれまで戦後、日本語との接触が中断され、70年以上使用がなかった環境でも日本語が潜伏している韓国と在中朝鮮人高年層の日本語について音声・語彙・文法・談話レベルで、そのバリエーション（標準形・方言形・非標準形）の保持とかかわる言語内の要因について記述してきた。その結果、地域や話者ごとに日本語変異の保持度は、言語習得環境と強い相関関係にあることを指摘してきた。

近年、日本語学習を強要させられた植民地経験世代は急激に減少している。しかし、彼らを対象とした研究は主に歴史的文献史料による解釈が行なわれ、具体的な日本語習得課程と現在の言語状況に関する実証的研究はほとんど行なわれてこなかった。本稿は1945年以前、日本による植民地支配下におかれていた中国東北地域で使われていた日本語について、当時の日本語教育を受けた在中朝鮮人の口述史料を文献史料と照らし合わせながら、日本語保持とかかわる社会言語学的様相を記述するものである。つまり歴史的史料を通して日本語普及政策と在中朝鮮人の日本人接触の様相、日本語習得をめぐる社会的背景を検証すると同時に、フィールドワークによる口述史料にみられる言語外的事実を明確にする。

2. 在満朝鮮人日本語学習者の社会的背景

2. 1 在満朝鮮人の移住と人口¹

¹ 本稿では、時期によって中国東北地域に居住していた戦前の朝鮮人を「在満朝鮮人」とし、戦後の朝鮮族と呼ばれる人を「在中朝鮮人」と区別する。

日本は、1931年満州事変をきっかけに中国東北地域を占領し、中国占領の戦略基地として集団移民・開拓移民政策を展開し、朝鮮人を強制移住させる。生活の苦難を解決する、または独立運動のため、多くの朝鮮人が満州へ押し寄せる。移住民の主流は慶尚道と全羅道地域の出身で、西満州と北満州など韓半島から比較的遠く離れた地域に移住した。

本稿の調査地である延辺地域は、植民地期の1930年代に全体住民の76%が朝鮮人で構成されるほど、朝鮮人の絶対的な影響下にあった。ちなみに中国東北地域の朝鮮人数は全体朝鮮人（2千5百万人）の9%に当たる216万人であったが、1945年に50万人が帰国し、150万人が残る（薛2004）。「延辺朝鮮族自治州統計年鑑」によると、1949年延辺地域の朝鮮人人口は52万9,258人に至り、在中朝鮮人の半分ぐらいが延辺地域に居住していた（郭2013）。その後、1990年に在中朝鮮人は中国の全地域に192万人が居住しており、吉林省の延辺朝鮮族自治州に82万人が暮らしている²。

70年以上を過ぎた現在、在満朝鮮人日本語学習者の人口はどうなっているのだろうか。植民地支配の後期に当たる1944年、中国東北地方で日本語を習った在満朝鮮人学生および児童の総数は、この地域の初等教育課程の学生数だけで84,887人と知られている（金2001）。1945年8月15日時点で（一定レベルの日本語を保持していたと考えられる）国民学校4年生以上だった、1932年以前の出生者は、2017年現在85歳前後になっている。これに当たる延辺地域の在中朝鮮人高年層は全体82万人の約3%に当たる2万6千人がいると推定され、そのうち学校教育を受けたのは韓国の1.4%を考慮に入れると、11,480人になるが、正確な統計資料は分かりにくい³。

2. 2 在満日本人の移住と人口

満州事変以前、満州各地には日本人人口が比較的広く分布しており、人口も非常に多く増えるようになる。<表1>の1928年満州地方の在留日本人の人口統計表をみると分かる。

² 中国統計出版社（2002）「中国2000年人口調査資料（上・中・下）」でも192万3842人という調査記録があり、『在中同胞史叢書 13 中国韓国人の歴史（上）』のデータとも一致している。大差はないことになるが、実際は中国漢族の流入や在中朝鮮人の国内外への移動を考慮すると、流動的な側面がある。

³ 2005年末統計庁（<http://kosis.nso.go.kr/>）によると、韓国高年層の75歳以上の人口は1,432,417人で、全人口（47,278,951人）の約3%を占めていた。そのうち、学校教育を受けた人は668,170人（1.4%）であった。2015年現在、85歳以上の人口は523,370人（男132,191人・女391,179人）で、全人口（49,705,663人）の約1.05%を占めている。上記の学校教育を受けた層の割合（1.4%）を考慮すれば7,327人になる。これが現在も植民地日本語を保持している韓国高年層日本語学習者の数と推定される。なお、10年間36.5%に当たる909,047人が亡くなったことになる。

<表1> 満州地方在留日本人人口調査（1928年末）⁴

	日本人	朝鮮人		日本人	朝鮮人		日本人	朝鮮人
龍井	1,168	139,217	帽児山	98	13,005	新民府	95	1,859
軍春	362	49,235	鉄嶺	6,223	10,183	通化	52	50,798
局子街	326	72,472	陶鹿	61	3,131	海龍	108	11,414
頭道溝	194	94,267	鄭家屯	255	1,663	安東	11,578	39,340
百草溝	86	27,639	長春	15,878	3,050	齊濟哈爾	358	308
牛莊	9,164	1,024	農安	7	167	満州裏	240	103
遼陽	11,084	408	吉林	1,229	29,880	—	—	—
奉天	41,777	10,719	ハルビン	4,198	14,240	合計	104,541	574,12

<表1>をみると、日本領事館管轄区域内の日本人移民総数は、104,541人で、朝鮮人移民総数（574,122人）の18.2%ぐらいしかいない。具体的にみると、満州で日本人人口が1万人を超えるところは四ヶ所（網掛け）であったが、すべて大都市である。逆に満州の朝鮮人人口は日本人人口に比べ、約4倍以上多く、主に広大な農村地域に分布しており、また一ヶ所（龍井）に人口が相対的に集結し、比較的に大きな集居区を形成していた（李2011）。

- (1) W2: あの時はね、農村で暮らしがまずくてね、仕方がなくてね、私のお父さんが私一人を連れてね、この中国、あの時は満州と言ったんですね。

1932年、日本が「満州国」を建てた後も以前日本が満州で取得した治外法権が継続して存在するようになる。それで日本人の満州移住はさらに多く進行されるようになり、官公吏・会社員・銀行事務員・鉄道従業員・各種労働者などの職業が新たに増加した。在満日本人は主に大中都市に分布していたのである。在満朝鮮人の農村分布を考慮すると、このことは在満朝鮮人と日本人のネットワークはそれほど強くなかったことを示す。

3. 先行研究

まず、中国における日本語教育史については、駒込（1991）、関（1997）などが教育制度的な側面から全体相を概観している。日本語教育の三つの軸になる教師と学生、教材については、伊月（2016）などが大量の史料を収集して細かく記述している。そして、言語政策的な面からは、安田（1998）などが具体的な史料を取り上げ

⁴ 外務省編（1937）『外務省警察史』第14巻（1997.9復刻）不二出版 p.246

ながら言語帝国主義という一貫した観点から論じている。また、言語意識の側面からは任（2012）などが世代別の日本（語）に対する評価をフィールドワークを通して調査している。

最近、植民地学習者の言語習得以降の日本語の摩滅および保持の事情に関する研究（真田2009）まで考察の領域が拡大されている。2000年代に入って在中朝鮮人の歴史に関する研究が多くなっている。しかし、旧満州地域における言語的被抑圧者として経験者の証言に基づく口述史料（oral history）研究は、集団移民一世代に対する口述調査から移住時期と暮らしや教育に関する証言を整理した鄭（2016）と、日本帝国時代に全羅道地域から満州地域に移住した事例をまとめた朴（2009）を除くと、中国東北地域においてマクロな視点から植民地日本語学習者の言語動態とかかわる社会言語学的考察は見当たらない。

4. 調査概要

筆者は、2010年7月に中国東北部の延辺朝鮮族自治州（延吉市・圖們市）をフィールドとして在中朝鮮人高年層5人（調査当時80歳～85歳）に対し、日本（語）に対する意識、言語運用能力、日本語学習の歴史などに関する聞き取り調査を実施した。本稿では在中朝鮮人を、当時の日本語接触環境によって大きく三つの類型（P・M・W層⁵）にわけ、その社会的背景を中心とする言語外的要素を記述していく。本稿で対象とする在中朝鮮人5人の属性を<表2>にまとめた。

<表2>在中朝鮮人の話者情報

話者名	性別	生年	出身地	日本語学習歴	職業歴
P1	男	1931	咸鏡道	国民学校（6）	
M1	女	1927	全羅道	小学校（6）・高等女学校（3）	教師
M2	男	1931	延吉市	国民学校（6）・国民高等学校（1）	
W1	男	1926	平安道	小学校（6）・中等専門学校（2）	造船業
W2	男	1928	黄海道	小学校（4）	魚店・給仕

*（ ）内は該当する年数を示す。日本帝国時代に日本人を対象とする初等教育は<尋常小学校>、朝鮮人を対象とする初等教育は<普通学校><初級・高級小学校>で行なわれたが、1938年の<新学制>により<初級・高級小学校>は<国民学校・国民優級学校>に代わり、1941年からはすべて<国民学校>に改称される。

⁵ それぞれ「①小学校卒業まで日本語を学習したグループ（P層）、②中学校卒業まで日本語を学習したグループ（M層）、③小学校卒業まで日本語を学習した後、職場でも使用したグループ（W層）」である。

以下では、中国朝鮮族社会において植民地日本語が現在どのように残っているのかについて彼らをめぐる社会的状況から検討する。1945年以降は在中朝鮮人同士で日本語によるコミュニケーションをすることはなく、日本語は個人レベルで維持されてきた。配偶者が日本語を話すことができる場合、朝鮮語と日本語を混ぜて使うことがあり、特に周囲に知られたい秘密を話すときは日本語を使うことがあったそうである。そして、個人的に辞書を通して日本語を勉強したり、衛星放送でNHK番組を視聴したり、延辺に来た日本人を相手に話したり、1970年代後半から大学などの教育機関から依頼を受けて日本語教師として教えたりしたケースもあった。

5. 在満朝鮮人における日本語習得史

5.1 教育制度

中国東北地域の場合、1928年国民党政権によって制定された「戊辰学制」をそのまま継承し、初等教育は授業年限4年の初級小学校と2年の高級小学校に分け、中等教育は授業年限3年の初級中学校と高級中学校で構成された。満州事変以前は、①満鉄経営普通学校、②朝鮮総督府直轄学校、③朝鮮総督府補助学校、④宗教関係私立学校、⑤反日団体関係私立学校、⑥純鮮人私立学校、⑦支那側設立学校（鮮支共学）に分けられ、朝鮮人児童の教育機関は種類が複雑であった。満州国が成立した後は主に、①満州帝国、②日本、③朝鮮民族主義者によって教育施設が作られていた。

満州各地に散在している朝鮮人学校数は、414校（内初等学校226校、書堂138校、中等学校7校、幼稚園27校、特種学校16校）で、受容生徒数47,474人に至る。日本人小学校数は42校、児童数は27,787人である。小学校の入学年齢は満6歳と規定されていたが、実際は実行できず、10歳前後の就学者が最も多い傾向を示す（奉天興亜協会1937）。

また1938年以降、朝鮮と満州の学校制度がほとんど一致するようになるが、以下の証言から中国東北地域の教育支援は、日本人中学校進学における差別、日本語使用状況や日本人校長の存在を確認することができる。

(2) W1：日本人の中学校だから、朝鮮人は試験を受けることができるが、合格はできない。…朝鮮人は国民優給学校つちゅうのを作ってですね、ほれで朝鮮人がここで日本語を習う、ね、こういうの形式になっちゃうんですよ。

(3) W2：小学校、私はその時は小学校4年生ですから、5年、6年、3年間の間ではみんな日本語使って、その後わたくしは第二高等学校という中学校です。龍井第二国民高等学校、あの学校に入って働いたんですよ。軍人の教官も日本人、校長も日本人ですよ。

話者W1の証言(2)から1935年の状況はまだ朝鮮人中等教育機関はなく⁶、中等教育を受けようとする人は各地に所在している日本人中等学校に入学するしかなかったことが分かる。しかし、入学を希望するとしても深刻な競争試験を受けなければならぬため、入学許可を得ることは極めて難しいことになっており、入学を希望したが、かなえない人が多かった(嶋田1935)。

そして、1938年2月、「朝鮮陸軍特別志願令」が公布され、1942年の朝鮮人徴兵制実施で朝鮮人学校は戦時体制下の軍事訓練場に、戦時兵力および労働力動員のための手段に転落し、事実上、教育の意義を失った。1940年12月、満州国当局は新学制に対する修正において各級学校では必ず教練科を設置するように規定し、日本予備軍や満州国の軍官として派遣したり、教練・射撃・指揮法・防毒・距離測定・軍事講演・軍事検閲・行軍・入営訓練など多様な軍事教育を実施した(国史編纂委員会2013)。これらのことが日本語の入力(input)の強化要因になったのではないかと考えられるが、「軍隊と日本語」にかかわる言語問題は別途の稿で扱いたい。

5. 2 朝鮮語の使用

本稿の在満朝鮮人(1920~30年代生まれ)を含め、ほとんどの在満朝鮮人は国語(日本語)普及計画が厳しく強要されていた1930年代に「国語として日本語教育」を受けた。在満朝鮮人が受けていた国語(日本語)教育は、主に初等教育4・6年、中等教育3・5年の教育課程で実施された。1932年満州国の成立後、全地域の学校で日本語教育を実施し、1933年以降初級小学校3年生からは日本語授業を開始(「随意科」週2時間)、1936年から初級小学校1年生から正規科目になる(伊月2016)。

1938年より<新学制>が実施され、日本語を<国語>とし、すべての学校で必須科目になり、授業時間数をもっとも多くなり、朝鮮語は選択科目となる。1940年、朝鮮人に創氏改名を強要してからは朝鮮語使用を一切禁止し、日本語のみを使用するようにした(孫2002)。

このように1939年当時、満州国では「朝鮮語」使用が禁止されており、満州国の教育政策に対し、韓国人社会の抵抗もあったが、強制性を帯びて進められた教育であったため、そのまま従うしかなかった。1938年から日本帝国は朝鮮人学校での朝鮮語教科を従来の必須科目から随意科目に転落させ、授業時数も大幅に減らした。1941年からはすべての学校の教育課程から朝鮮語教科目を徹底的に除外させ、日常用語まで朝鮮語の使用を厳しく制限し、これを守らなかった者に対しては罰金・体罰・退学

⁶ 1930年代に朝鮮から満州へ集団移住した村には、韓国人教育機関がほとんど設置されていなかった。これは延辺をはじめ、新しく村が形成された地域に共通して現れた現象であった(金2011)。

などの規制を課した。

これとかかわって戦前、延吉と琿春で学校に通っていた金(1927年生まれ)は「1939年か、この時、満州国で何をしたのかね。日本語を国語として習い、朝鮮語を習うな、こんな本領が下されたね。僕たちが小学校当時には6年生まで朝鮮語を習ったが」と言いながら「朝鮮語運動」を民族運動と思う雰囲気蔓延していたという。つまり、言語と民族運動の相関性を通して民族的アイデンティティを見つけようとしたが、結局は満州国の<五族協和><内鮮一体>の強力な教育政策で「集団部落」の教育は徐々に愚民化していったそうだ。

一方、吉林第6国民高等学校の学生も学校当局の老骨的な「皇民化」教育に怒りをもち、1943年の夏、同盟休学を断行し、日本人校長を追放した。続いて1944年9月、学生は再び同盟休学を実行し、学校当局に朝鮮人学生の課外時間における朝鮮語使用の禁止をなくすようにした(嶋田1935)。

以下のように中国の東北地域の場合も学校内の監視制度の運営とともに、日本語使用を強制させようとしていた動きがあった。

- (4) M1: 学校では日本語、話さなかったら、罰を受けますね。日本語は、日本が侵略したことを分かった時からね、日本語を排斥しましたよ。遠足に行ってから、日本語の軍歌を教えて、あの、日本人の先生が教えましたね。…それで、兄と姉、あの人が話をするのを聞いて、私は日本語を学校に入学する前、みんな日常生活の話は、する、できましたんですよ。日本人の先生はね、私がこのアンズ県に来た時に日本人の先生は一人もいなかったんですよ。
- (5) M2: 敵を防ぐことやって、学校でもあの、1943年からは昼の時間、午後はね、午後の時間はみんな軍事訓練をやったんです。学校では、…彼も日本語をやっているから、家庭では兄弟ちかんで日本語、使っていました。
- (6) W1: 朝鮮語、使ってもいいんです。それ、できないから、3年からは日本語使わないと、できないんです。
- (7) W2: あの時もですね、え、日本語はね、日常、日本語日常化としてね、日本語しなければね、もし朝鮮語使ったら、罰、あの時はね、札をあげるん、札、こんな、札はね、だれが学生の間ね、誰が朝鮮語使ったら、札あげるんですよ。それで放課後にね、あの、誰が持っているか、あの札を持っている人がね、便所掃除をするんですよ。便所掃除、トイレ、便所掃除をするんですよ。そうですからね、学校に行ったらみんな日本語をしゃべって朝鮮語は使わないですよ。…小学校卒業するまではね、日本

人との付き合いはあまりなかったんです。

以上からは当時、個人別に家庭内外での日本語習得ネットワークをみると、韓国人同士のネットワークが形成されており、日本人の友だちとの接触は地域、個人と教育課程によって差があるが、初等教育ではほとんどなかったといえる。

5. 3 日本語学習の動機

当時、就業のみではなく中等学校への進学を目標とした学生が多かったという話者M2の証言によると、中等学校への進学と日本語学習の動機の間には強い相関関係があったと考えられる。

- (8) M2：一生懸命励んで中学校に行くことが目的だから、友達は。一般の家庭では中学校に行くことができたんですから、それでも農村で働いている、この、農民の家庭では中学校も行けることができないんです。

1936年から中国東北地域で実施された語学検定試験による「語学加俸制度」⁷も同じ脈絡から理解できよう。韓国で証言を集めている片桐（1998）も「日本語ができないと社会の落伍者になる。よりいい仕事を得るために日本語が必要であった。父母から楽に暮らしたいなら日本語だけは習えと聞かれた」などの植民地学習者の証言を紹介している。このように植民地支配下で生きていくためには高い日本語能力が求められており、これが日本語習得への強い動機付けになっているといえよう。

5. 4 授業内容

次の<表3>のように1933年以降、在満朝鮮人児童は普通学校に入学し、「修身・国語・朝鮮語・算術・日本歴史（国史）・地理・理科・職業・図画・手工・唱歌・体操・裁縫および家事（女学生のみ）」などの科目を習った。国語（日本語）は全体授業の46.2%（84時間／182時間）を、朝鮮語は8.2%（15時間／182時間）を占めていた。日本語の授業は一年生より必修科目となり、朝鮮語授業時間数の約5倍となっている。つまり、この時期から学校教育では日本語は既に朝鮮語以上の地位を有するようになっている。中等教育の教科でも「国語（日本語）」は他の科目に比べ、時間数がもっとも多く、カリキュラムの33.2%（64時間／193時間）を占めていた。

⁷ 満鉄が1936年から一般民衆に日本語学習意欲を高めると同時に満鉄従業員または満州国官吏を養成するための目的で始めたもので試験に合格した官吏に各級（特等から三等まで）によって特別手当が支給されたのである。

<表3>普通学校における各学年の毎週教授時間数（1933年）

	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	第六学年
修身	1	1	1	1	1	1
国語	11	12	13	14	国語17 国史2	国語17 国史2
算術	4	5	5	5	算術5 地理2	算術5 地理2
鮮語	2	3	3	3	鮮語2 理科2	鮮語2 理科2
体操	2	2	2	2	体操2 農業2	体操2 農業2
唱歌	2	2	2	2	1	1
図画	2	2	2	2	1	1
備考	女学生に限り、手工・裁縫を1時間教授する。					

*出自：在満興京朝鮮人人民会会長金弼鉉「昭和8年度当民会経営興京普通学校補助金下附申請書」『興京民』第97号（国史編纂委員会（2013）から再引用）。

<表3>は日本語が占める授業時数の割合の変化を示している。国語授業のみではなく、他教科の授業も日本語で行なわれていたことは特記すべきである。しかし、証言（M1）では教師が独立運動などの理由で満州地域で教育活動をするようになり、教授用語に朝鮮語を媒介とし、実際は朝鮮語の使用が比較的が多かった背景について述べている。

- (9) M1：朝鮮人の先生から日本語を習いましたね。あの先生の発音がみんな違って私はうちに帰ってから、あや、先生、日本語の発音、とてもとても悪いとゆって、嘲笑しました。アンズ県の小学校、通う時は、朝鮮人の先生だからね、朝鮮語で話しても罰をしないですよ。

在満朝鮮人は延辺地域に移住した後、大部分は朝鮮人同士が集まり、集落を形成した（金2001）。それで彼らはほとんど他民族との接触が少ない、相対的に閉鎖した生活をし、朝鮮人学校での国語教育はすべて韓半島の体系に従っていたし、韓半島の言語をそのまま保持することができたこともかかわっている。このことは日本体制に対抗する民族主義の発現として当時朝鮮人の強烈的な反体制運動の結果であると考えられる（金2005）。このように第一言語として朝鮮語を使う民族教育がどれほど（第三言語の中国語の干渉を含め）第二言語の日本語の保持に影響を与えたのかについてその具体的言語項目の考察は今後の課題としたい。

5. 5 教材

中国東北地域では1934年から翌年にかけて文教部編纂の国定教科書である「初級

小學校日本語教科書（上・下）」「高級小學校日本語教科書（上・下）」などが出版され、その後、「國民學校日語國民讀本（全8巻）」「國民優級學校日語國民讀本（全2巻）」「正則日本語讀本（全4巻）」を経て、1939年には独自の「小學日本語讀本（全4巻）」が国定教科書として発行されるが、<国定>というのは名目のみであって、教師の不足により、その他の雑多なものが教材として使用されていたことを駒込（1991）は指摘している。

- (10) M2：小学校5年の時に「浜辺の歌」、国語に載っておるんですけどね、「われは海の星」、この歌、分かるんですか。小学校5年の日本の国語の本にね、第6課に、6課か7課にあったんです。
- (11) M3：教科書はみんなその時の朝鮮総督府の、朝鮮から来た、朝鮮語で、ケイジョウから、今ソウルから出版してここに来たんです。中国で当時こちらで出版していませんでした。

話者M2のインタビューに同席した延吉市居住の在中朝鮮人M3からは、1934年以前朝鮮から持ってきた教科書をそのまま使用していたという証言が得られた。当時、各部落では自発的に民会や学校を設立し、学校教育も意外と全満州が一斉に朝鮮総督府学制に基づき、教科書も総督府編纂の教科書を使用していた。その背景には、朝鮮総督府と満鉄会社の協定要項に「①朝鮮総督府の朝鮮人教育方針およびそれに関する規定に拠ること、②教科書、朝鮮総督府編纂の本を使うこと、しかし朝鮮総督府が編纂しなかった場合はこの条件に限らなくていいこと、③教員を採用する際、可能な限り朝鮮で長期間教育に従事した資格のあるものを採用すること（嶋田1935）」があったからだといえよう。

5. 6 教授用語

続いて教室内での日本語習得環境について調べるために授業の実際の様相はどうだったのかをみる。まず、証言ではメタ言語による教師の説明はほとんどおこなわれず、繰り返す、真似をしながら書き読みの時間が多かったこと、軍隊式の教育環境であったことが分かる。

- (12) P1：先生が説明、教科書（で）、先生がみんな日本語です。文法は、学習しなかったが、現在には、中国の小学校でも、一般には、文法を、単独に学習しないです。わたしが、小学校で学習する時は、（文法が）、文法、学習しないです。*（ ）内は韓国語の訳。
- (13) M2：中国の皇帝陛下、そう、朝、朝会の時間には東に向かって宮城遙拝、

西に向かって帝宮遙拝、これをやって、君が代を歌って、

次に、満州に駐在していた内地人（日本人）の人口と出身地の統計を通して在満朝鮮人と日本人との接触とかかわる言語事情をみる。満州に駐在していた内地人（日本人）の人口および出身地に関する当時の統計をみると、<表4>のようになる。つまり、1935年当時の吉林省における日本人の出身地別人口をまとめたものである。

<表4>吉林省在留日本人の都道府県別号口⁸（1935年12月末）

出身地	人口	出身地	人口	出身地	人口	出身地	人口
1. 九州区	2,837	京都	116	東京	315	静岡	125
福岡	824	大阪	98	神奈川	80	愛知	214
佐賀	305	兵庫	161		73%	三重	76
長崎	370	奈良	50	6. 東北区	592		91%
熊本	488	和歌山	65	青森	74	9. 東山区	372
大分	202		56%	岩手	54	山梨	123
宮崎	127	4. 四国区	532	宮城	133	長野	153
鹿児島	521	徳島	57	秋田	74	岐阜	96
	36%	香川	117	山形	149		96%
2. 中國区	1,012	愛媛	249	福島	108	10. 北海道	248
鳥取	71	高知	109		81%	11. 沖縄	3
島根	99		63%	7. 北陸区	404		99%
岡山	196	5. 関東区	762	新潟	173	12. 樺太	18
広島	319	茨城	98	富山	86	13. 台湾	?
山口	327	栃木	104	石川	72		
	49%	群馬	63	福井	73		
3. 近畿区	569	埼玉	43		86%		
滋賀	79	千葉	59	8. 東海区	415	計	7,866

*網掛けの数字（%）はそれぞれの割合を累積数値で表したものである。表は筆者が注8の史料をまとめなおしたものである。

⁸ 外務省編（1937）『外務省警察史』第14巻（1997.9復刻）不二出版 pp. 8-9

<表4>からその出身地別の人口が多いところは、「福岡・鹿児島・熊本・長崎・山口・広島・東京・佐賀・愛媛・北海道・愛知・大分・岡山・新潟・兵庫・山形・宮城・宮崎・静岡・山梨・香川・京都・高知・福島・栃木」の順であり、(東京・北海道を除く)上位13県はすべて西日本地域の出身であることが確認される。これを地域別に大まかにまとめても人口の多い順は、「九州・中国・関東・東北・近畿・四国・北陸・東海・東山(一部が西日本方言地域)・北海道・沖縄・樺太・台湾」であり、西日本出身者(4,950人、全体の63%)が多いことが分かる。つまり、満州に駐在していた日本人は全体的に西日本地域出身者が多かったといえる。

特に、九州に属する7個の地方の日本移民は1,056号2,837人で、48個地区日本移民総数の約36.1%を示す。本稿の在満朝鮮人のうち、当時職場で日本人と一緒に働いた経験を持つ人(W層)はこの時期に西日本地域出身者と接触している可能性が高い。

実際、在満朝鮮人の植民地日本語にはオル・トルを含め、方言形式が当時の教師の言葉を引用する場合に現れることから教授用語にも方言的要素が混じっていたことが類推できる。しかし、その日本語は西日本の方言的色彩がより強い韓国に比べ、延辺地域の在満朝鮮人の日本語には西日本地域の方言的要素が少ないことからみると、中国では同じく西日本出身の日本人教師が多かったものの、日本人教師より朝鮮人教師との接触度が方言形保持度に反比例する形で残っているといえよう。

5.7 教師と学生

当時の教師と学生の数に関する史料から、1945年以前の満州における日本人教師・学生と韓国人教師・学生の数を示すと、下の<表5・6>のようになる。

<表5> 間島琿春地方日本側施設学校の学生・教員統計表(1932年)

	学校	日系			鮮系			満系			計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
学生	38	16	16	33	415	156	<u>571</u>	7	-	7	4329	1727	6056
教員		24	7	<u>31</u>	106	9	<u>110</u>	1	-	1	131	16	147

表から日本人教師・学生より朝鮮人教師・学生が多いことが分かる(下線部)。

<表6> 満州国内の朝鮮人学校の統計表(1935年)

	学校数				学生数				教員数			
	幼	小	中	計	幼	小	中	計	日	満	鮮	計
奉天省	4	70	-	74	216	7038	-	7254	23	3	167	193
吉林省	-	91	8	99	-	8248	1099	9347	39	5	266	310
黒龍江	-	3	-	3	-	162	-	162	-	1	6	7
計	4	164	8	176	216	15448	1099	16793	<u>62</u>	9	<u>439</u>	510

*左側から幼稚園・小学校・中学校、日系・満州系・朝鮮系の順である。[出自]嶋田(1935)『第三篇朝鮮人教育』『満洲教育史』文教社、pp.413-469。

日本人教師の割合が朝鮮より低かったこととかわり、「付属地および関東州の教員の確保が図られていたが、中国人教員のほとんどは満州国の官吏になり、日本人教員の数が絶対的に不足していた。日本語教員、特に日本人教員の不足という事態はそれ以降にも変わらず1943年時点で約4千人の中等学校の教員のうち、日本人は約1千人、初等学校は約5万人のうち、約1千人の状況であった(福井1943)」と述べられている。

また、日本人・日本人学生との接触がまれであったことは、中国東北地域も朝鮮内と同様であり、植民地学習者同士のコミュニティが形成されており、日本人学生との交流は初等教育課程ではほとんどなかったが、ただ日本人の多数居住地では日本語を日常語として使用していたそうである。

- (14) P1: わたくしが龍井で生活したのですが、わたくしの(村に)、戦争する時、日本人はなかった、なかったです。ないから、日本語を、(使う機会が)、(なかった)。…校長は日本人ですが、先生は、###、日本人です。先生がみんな朝鮮人です。(＃は中国語)
- (15) M2: そんなに学生同士の、みんな幼いですからね、日本の学校と朝鮮人の学校、お互いに敵視関係にあってね、あの、時々ね、お互いに喧嘩をする。…日本人の友達、小学校ですからね、友達がそんなに、そんな機会がなかったんです。
- (16) W2: 私の通っている学校は龍井で一番大きな学校、学生生徒がその時、2千5百人くらいあるんですよ。大きな学校ですけれども、みんな朝鮮人です。先生が日本人がちょっとあるんですけども少ない。あの時、先生方が6、7じゅうくらいあるんですけどもね、日本人はみんな10人もならないんですし、先生は朝鮮人だけでも、校長と教頭、みんな

な日本人です。

以上、在満朝鮮人の植民地日本語は基本的に教室場面で習得されたものであるが、教師・生徒・隣人・職場の仲間などの日本人との接触による自然習得も少ないものがあったのである。

6. おわりに

以上、日本による植民地期の中国東北地域における植民地当時の教育制度と日本語との接触様相を証言と史料の対照を通して考察し、現在の使用状況とのかかわりについても記述した。それぞれの事項から在満朝鮮人日本語の社会的背景と言語外的側面を次のようにまとめることができよう。

- (a) 在満朝鮮人の植民地日本語は、教育制度、朝鮮語の使用、学習動機の側面からみて植民地的学校教育の垣の中に閉じ込まれ、1930年代半ばからは日本語の習得という選択肢を選ぶしかなかった。ただ、当時朝鮮人教師による民族教育が行なわれ、母語の朝鮮語能力も維持していたと考えられる。そして自発的ではなかったが、父母の移住、本人の進学・就職に伴い、日本語が生活語として必然的な手段になったのである。
- (b) 在満朝鮮人の植民地日本語は、授業内容、教材、教授用語、教師・学生の数からみて主に多数の韓国人教師と少数の西日本地域出身の日本人教師が教える教室場面で習得されたが、初等教育では日本人とのネットワークの形成は難しい状況であった。そして教室場面以外でも日本人との接触から自然習得する場合があるのはあったが、教室外の環境が彼らの日本語に与えた影響は多くはないといえよう。また、中国東北地域の在満朝鮮人の場合は、教材や進学の面でも朝鮮に比べて劣悪な環境におかれていたといえる。

植民地期に在満朝鮮人が学校教育と社会生活を通して覚えている日本語は、長期間にわたって公的な場面での使用は禁止されたにもかかわらず、少なくない数の話者に保持されている。70年以上使用されていない、(日本を含む)他地域の植民地日本語の形成過程との詳細な比較が求められる。植民地という特殊な状況下で日本を経験し、日本語を学習した世代は高齢化によって急激に人口が減少し、その日本語は次世代に伝わらない特徴がある。彼らの記憶を口述史料 (oral history) として体系的に記録することを急ぐべきであろう。

〈参考文献〉

- 伊月知子 (2016) 「『満州国』の日本語教育が及ぼした影響—大東亜共栄圏における日本語の普及を巡って—」『韓国日本語学会第34回国際学術発表会要旨集』 pp. 148-152
- 片桐芳雄 (1998) 「記憶された植民地教育—韓国・大邱での聞き取り調査をもとに—」『植民地教育史像の再編成』植民地教育史年報第1号 皓星社 pp. 70-90
- 駒込武 (1991) 「戦前期中国大陸における日本語教育」『講座日本語と日本語教育15巻—日本語教育の歴史—』 明治書院 pp. 127-144
- 真田信治 (2009) 『越境した日本語—話者の「語り」から—』 和泉書院
- 嶋田道彌 (1935) 「第三篇朝鮮人教育」『満州教育史』 文教社 pp. 413-469
- 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク
- 福井優 (1943) 「満州国に於ける日本語普及の状況」『外地・大陸・南方日本語教授実践』 国語文化学会編 pp. 180-187
- 奉天興亜協会 (1937) 『在満朝鮮人通信』22・23合作号 pp. 19-22
- 安田敏朗 (1998) 『植民地のなかの国語学』 三元社
- 郭承志 (2013) 『朝鮮族、彼らはだれなのか—中国定着過程からの悲しい歴史—』 図書出版 人間サラン
- 国史編纂委員会 (2013) 『在外同胞史叢書15 中国韓人の歴史 (資料集)』 バンディコム
- 金石柱 (2005) 「延辺朝鮮族自治州の文化的変化に関する研究」『韓国地域地理学会誌』第12巻第1号 pp. 16-30
- 金周溶 (2011) 「満州地域韓人集団移住と強制性」『移民と開発—韓中日三国人の満州移住の歴史—』 東北亜歴史財団 pp. 125-151
- 金春善 (2001) 『延辺地区朝鮮族社会的形成研究』 吉林人民出版社
- 朴仁哲 (2009) 「1930-1940年代における朝鮮人の満洲への移住に関する研究—全羅北道地域を事例として—」『韓日民族問題研究』 pp. 51-83
- 孫春日 (2002) 『中国朝鮮族社会文化発展史』 延辺教育出版社
- 薛勇洙 (2004) 『在中同胞朝鮮族物語』 延辺未来文化社
- 李興碩 (2011) 「『外務省警察史』中の在満日本人人口に関する研究」『移民と開発—韓中日三国人の満州移住の歴史—』 東北亜歴史財団 pp. 153-182
- 任永哲編 (2012) 『国外同胞言語実態調査基礎研究』 報告書 国立国語院
- 鄭美娘 (2016) 『足で見つけ書いた朝鮮族近現代教育史』 サリムト